

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立二和小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

間違いが子どもの心を 楽にさせる

活気のある授業は子どもの発言が飛び交います。子どもが意見を言ってくれるから活性化された授業となります。

もう一つ大事なことがあります。それは聞いている子どもがいるということです。

黙って聞いている人がいるから発言できます。子どもは聞いている人に同意して欲しいと思いい、説得しようとしています。そこには、「どんな意見を言っても友だちや先生は聞いてくれる。否定しない」という安心感があります。

そんなクラスを作るコツはたった一つです。「間違ってくれてありがとう」と先生が思うことです。先生が子どもの間違いを「許す」ことです。

今回は「間違い」が子どもの心を楽にさせる授業法を紹介します。

1 間違いの中の「正解」に目を向ける

国語の時間に国字の勉強をしました。漢字は中国が発祥ですが、日本で作られた漢字があります。これを国字といいます。

まず「峠」を板書します。「とうげ」と読んだ子どもに意味を訊くと、「山の上り、下りと書くから、山を上り(登り)切って下り始める所」と説明します。「オー」という歓声が上がリ、国字が意味のある漢字の集合体であることを理解します。

次に「風」の一画目と二画目を板書すると、「かぜ」という声があります。「違うんだなあ」と言いながら、「止」を加えます。「風」という漢字です。

子どもたちは初めて目にしたようです。おそ

らく、「なき」という言葉を耳にしたことがなく、その現象を見たこともないのでしよう。そんな中で、「たいふういっか」と読んだ子どももいます。友達も「そうか、『風』も『台風』も天気に関係あるからね」となぜか納得気味です。



Q1 先生はどのように対応しますか。

- ①「間違いです。他にはありませんか」
- ②「オッ！ 台風一過」
- ③「『たいふういっか』を漢字で書いてくらん」
- ④「なるほど、天気の影響は受けているよね。良い発想をしているね」

①のように余計な解説を加えずに正誤だけを伝えたら、テンポよく授業は進みます。

しかし、子どもは好きで間違ったわけではありませぬ。

授業は人と人の交流、関係づくりの場でもあります。けんもほろろに対応する先生からは、子どもの心が離れて行きます。

自分が失敗をしたときに先生からフォローしてもらえなければ、挑戦する気になれません。

この積み重ねが消極的で発表をしないクラスにしていきます。

③のように言うことによって、自分が知っている漢字ではないということに気づきます。「台風一過」は四文字ですが、訊いている国字は一字です。子どもはそれを書くことで、自身で間違いだと確認し、正解の候補から外すことができます。

④のように「風」から連想する言葉を見つけたことは秀逸です。間違いでも、関連づけられたことは秀逸です。間違いでも、関連づけられた想像する力、考える力を評価され、子どもは満足できます。

教師と子どものやり取りを聞いていた友だちも「間違いでも根拠を示せば、先生は認めてくれる」という信頼を置くようになります。

②のようにすばやく反応し、笑顔で「台風一過」と返すと、子どもは、「正解」と期待します。

それを裏切らないような素振りでも子どもの横に歩み寄りませぬ。発言した子どもにも耳打ちするポーズを取ると、クラス全体が静かになります。先生が「正解」と告げると信じています。

意に反して、「違う」と耳元で囁くと、子どもは「エー」とがっかりします。その表情は恥ずかしいというより残念という感じです。まるで、クイズ番組に回答しているようです。

それを見ていた友だちも間違いだったことに気づきますが、間違った子どもを責めることもなく、「違うんだ。じゃあ、正解は何だろう」と我が事として再考します。

誤答がクラスの活気を引き出します。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

2 満点ではないが、80点

次に、「さざなみ」と答えた子どもがいます。どうやら、「海」を連想したようです。

Q2 「さざなみ」と答えた子どもにどんな言葉をかけますか。

- ① 「違います」
- ② 「80点」
- ③ 「惜しい！」

①は子どもの意欲を低下させる不適切な言葉だということは前問で述べました。

③のように言う子どもは「先生、ちょっと待って。考えるから」と新たな解を探します。しかし、新たなヒントとならないので、なかなか正解に近づけません。

私は、②のように子どもの正解度を点数化して返しています。

「80点」と聞くと、子どもたちは、「どこが合っているの」と考えを焦点化します。

「さざなみを見られる場所はどこ？」と訊くと、「海」と答えるので、「そうだよ。海に關係する言葉だよ」と答えの絞り込みを図ります。

「さざなみ」と言った子どもに「君の間違いのお陰で正解を絞り込むことができたよ。ありがとう」とお礼を言うと、嬉しそうな笑顔を返します（でも、誤答です）。

間違いは、福引の「はずれ」のようなものです。「はずれ」が出れば出るほど「当たり」を引く可能性が高くなります。

間違いも同じです。それを正解の候補から外し、

他を考えようとしています。

点数化すると、子どもは満点を取ろうとします。また、低い点数を取りたくないのので、誤答の精度を確認することができます。

誤答が出ることで、「考えなさい」と言わなくても異同弁別をしようとしています。

3 間違った子どもがチャンピオン

Q3 80点を取った子どもが着席しようとしています。先生はこの時どう対応しますか。

- ① そのまま座らせる。
- ② 立ったままにさせる。
- ③ 黒板の前に来させる。

一般的には①です。この後、落ち着いた雰囲気です。

しかし、これでは間違ってくれた子どもは過去の人になってしまいます。せっかく間違ってくれたのですから、晴れがましい思い、ヒーロー気分を体験させてやりたいものです。

そこで、②のように立たせたままで、「さあ、今のところ80点がこのクラスの最高点。A君がチャンピオンです。新チャンピオンが誕生するでしょうか！」と子どもを挑発し、やる気を高めます。授業は「知的ゲーム」でもあります。

子どもが発表するたびに点数をつけます。「残念！ 70点。A君の勝ち」と先生はサッと腕をA君に上げ、勝ち抜きを宣言します。

「なぎさ」と言ったB君には、一呼吸置いて、

「90点！ 新チャンピオン誕生」と拍手を送ります。今度はB君が起立します。

さらに③のように黒板の前に置かれた椅子に座らせます。「チャンピオンシート」です。

こうすると、景色が異なります。友だちの視線を一齐に受けることになります。見られているという程よい緊張感、誇らしさでもあります。

点数で満足感、チャンピオンシートで達成感を覚えます。もう一度言います。授業は「知的ゲーム」でもあります。



授業中、子どもたちは正解を期待して発表しますが、いつもそうなるとは限りません。

それどころか、間違いの方が多くでしょう。間違ってしまうと、友だちの目を気にしたり、間違った自分が恥ずかしいと思ったりします。その結果、「絶対に正解の時だけ発表しよう」と慎重になります。当然、授業が苦痛になり、学校生活の大方は授業なので、学校が嫌になってしまいます。

人生に間違い、失敗はつきものです。失敗は成功のもと、とも言います。間違いを授業に生かせば、子どもの心が楽になります。

それには、「間違ってくれてありがとう」です。